
八百万生徒会騒動記！

石榴石 歩馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八百万生徒会騒動記！

【Nコード】

N6526C

【作者名】

石榴石 歩馬

【あらすじ】

学芸都市八百万市にある万神高校。変わり者ばかりが集まるこの学校では毎日のように何かが起きる。それを治める為に生徒に負けず劣らずおかしな理事長のもとに作られたのが万神高校生徒会、通称“万屋”。執行部と情報部、事務部により構成されている“万屋”だが、やっぱり変わり者が多かった。その中で一年団の執行部長をになう紅宮サタンが、同じく生徒会に所属する幼なじみと友人、夜風アズミと空嶺カナタと共に東奔西走する物語。《最終更新日：2008/5/10》

プロローグ（前書き）

無駄に新作スタート。

「月蓮華」とは違うテンションでいきます。

プロローグ

「なあ、これはどーいう反応をすべきなんだ？」

「そう言われても。……ねえ？」

「はあ……。なんでこうなったんでしょうね……」

放課後のとある教室。

三人の少年少女が黒板を眺めて困り果てていた。

そこには

《生徒会一年団執行部の紅宮サタン、並びに空嶺カナタを抹殺せよ》
と大きく書かれている。

「アズミの名前がないってことは、あれが原因だよな……」

「……そうなりますね」

三人は顔を見合わせると、深い溜め息をついた。

ことの始まりは、一週間ほど前までさかのぼる。

1. ことの始まり

八百万事件ファイル“七不思議恋愛バトル”

首都圏にほど近い場所に、学芸都市として有名な八百万市やおよろずは存在する。

そして八百万市の中心にあり市の発展をになっている国内最大級の高校、名を万神高校みんしんがみという。

大学と見間違えそうなほど広大な敷地に充実した設備、生徒総数二千人あまりのこの学校には何故か変わり者ばかりが集まり、毎日のように騒動が起こっていた。

これはそのうちのとある事件の顛末である。

「せ、生徒会の皆さんですかっ!？」

六月の始め、梅雨入りが発表された途端に晴天となったこの日の放課後、ある数人の生徒は一人の少女の言葉によって厄介事に巻き込まれる羽目になった。

その台詞セリフを発したのは美人、というより可愛いといった方が正しいであろう美少女。私服OKの学校なので着ているのは制服ではなく青のワンピース。胸につけた校章と学年章で一年生だとわかる。

彼女の問いかけに返ってきた反応は三つだった。

「あ？誰だお前？」

「えっと、多分一応そういうことになってるらしいよ?」

「……え?あの、その……」

共通点は疑問符のみ、まさしく三者三様といったところだ。
そしていまいちまともな答えが得られず、どう返せばいいのかわからない少女。

まあガラが悪い男子生徒に不機嫌そうに質問で返され、おっとりした女子生徒にすぐ微妙な肯定を受け、おどおどした男子生徒にいたってはまともに口を開いてさえないのだ。そんな返答（？）をされれば大抵誰でも困るだろう。

ちなみに、こんな妙な状態を作り上げてしまった三人は多分でも一応でもなく生徒会のメンバーである。

といってもこの学校の生徒会は先輩や友人に半強制的に連れて来られた人ばかりで、協調性のなさはピカイチのため総勢四十人近いメンバーは各々でチームを組んで動いているのが普通だ。

生徒会の仕事は学校の運営と行事の司会、進行。加えて——なんでも屋のようなことをしているのである。

そのため、この万神高校生徒会は通称“万屋”^{マンヤ}と呼ばれてもいるのだが……なぜかその“万屋”の中でトップクラスの解決率を誇つて（？）いるのがこの三人のチームなのだ。

……本人たちにその自覚是一片たりともないだろうが。

最初に反応したガラが悪くて目付きも悪くてついでにファッションセンスもいまいち良くない不機嫌そうな少年。彼の名前は紅宮紗^{くみやさ}炎^{たん}。……親のネーミングセンスも疑いたいところだ。通称

「サタン」、もしくはその名前と見た目から

「悪魔の暴君」と呼ばれ恐れられる、計十人いる生徒会一年団の実質的なトップに君臨する人物である。肩書きは

「一年団執行部長」。ちなみに茶髪（地毛）、黒目で少し長髪。白い長ズボン（！）に赤いＴシャツ、白のワイシャツを重ね着している。

続いてとても曖昧な答えを返したのは（自称）チームの紅一点。

常ににこやかな笑顔を浮かべ、ふわふわとした雰囲気をかもし出す

少女、夜風鴉澄^{やなぎあすみ}。通称

「アズミ」、またの名を

「天然毒舌女神」だが本人の前で言うところ……。生徒会の情報部に所属しており、一年団で最も情報通である。サタンとは幼なじみ、もしくは腐れ縁な関係。鴉の濡れ羽色のショートヘアに茶色い瞳。深緑のキュロットスカートに白いワイシャツを身につけているが、和服がとても似合いそう。先の少女はまた違った清楚な美少女だ。まともに返事さえなかった少年は、おどおどとして少し挙動不審だ。前髪が長くうつ向いているため顔はほとんど見えない。なのに普通というのが似合うのが不思議である。彼の名は空嶺^{そらみね}彼方、サタンと同じく生徒会執行部に所属の一年生。といっても最近入ったばかりで、まだまだ経験不足。友人は少なく、サタンとアズミからは

「カナタ」と呼ばれている。墨色、というより灰色の髪、目は隠れて見えないが肌がかなり白い。黒のスボンに白のワイシャツ、黒いネクタイ。全体的に白と黒で統一されているようだった。

「という冗談はおいといてー。ほら、サタンがそんな怖い顔してるから怯えちゃってるよ」

「これが地顔だ。それに俺のせいじゃ……。おいカナタ隠れてんじやねえ」

アズミがにこにこしながらサタンをたしなめる。サタンはうつとうしそうにそっぽを向くが、いつの間にか廊下の影に隠れるように移動していたカナタに気付き彼を引っ張り出す。

「……………」

身長は長身のサタンと大して変わらないのに、その様子が子犬のように見えて少女は思わずぐりと笑ってしまった。

「あ、ごめんなさい！」

礼儀を欠いた自分の態度に気付き、少女は慌てて謝った。

「謝らなくていいよ。いつものことだし？」

アズミは手をひらひらさせながら言う。それでも恐縮している少女に、カナタが小さく呟いた。

「……こちらこそ、すみません」

その様子にサタンとアズミは驚いたようだった。意地悪そうな笑みを浮かべ、サタンが尋ねる。

「初対面の奴と話すなんて珍しいなあ、カナタ？ 美少女に話しかけられて嬉しいのか？」

「……………」

再び黙るカナタ。その表情は特に変化があつたようには見えない。呆れたようにアズミが口を開く。

「サタン、カナタをからかうのはやめなよ。……………それで、生徒会に用事ですか？」

前半は幼なじみの少年に、後半は話しかけてきた少女に向けられていた。

「はい。というよりは“万屋”さんになんですけど……………」

戸惑いながらもそう告げた少女。対してアズミはにっこりと笑い返した。

「わかりましたー。じゃあこんなところでは難ですし、食堂にでも行きましょう」

さつさと歩き出す三人に、少女は青いワンピースの裾をひるがえしながら急いで後を追いかけて行った。

誰かがその一部始終を見ていたのにも気付かずに。

2・生徒会の三人

この学校の敷地内には合計20棟の建物がある。

北から男子寮、塀をはさんで運動部部室棟、特殊課教棟、理科教棟、普通課教棟が三つ（北本館、中央本館、南本館）、情報・商業課教棟、芸術課教棟、文化部部室棟、また塀があつて女子寮。北西に体育館、南西に図書館があり、東側は広大な運動場。加えてテニスコート、プール、陸上競技専用トラックなんかもある。卓球場、武道場そのほか細々した建物がいくつが存在し、まさに学校として最高級の設備と言える。

ちなみにこの高校を西の正門、もしくは東の裏門から見ると左右対称に建物が並んでいることがわかる。……無駄に細かいが、どれが何の棟か覚えておかないと目的地と真逆に行ってしまう可能性があるため実に紛らわしい。更に無茶苦茶広いため、毎年新入生が迷子になるとか。

三人と少女がやって来たのは、校内に五ヶ所ほどある食堂のうち最も人気が高い中央本館にある食堂、通称本食。本職ではない。

四人が食堂に入ったとき偶然人が退いてたまたま空席になった六人掛けのテーブルの右端に腰を下ろすと、アズミが自己紹介を始めた。

「わたしは夜風アズミ。ご存じの通り、生徒会員です。で、こつちの目付きが悪いのはー」

「目付き悪い言うな。……紅宮サタンだ。一応、生徒会一年団のトップってことになってる」

アズミの左側に座ったサタンが面倒そうに名乗った。

「……………」

「おい、名前くらい自分で言え」

左隣で無言のままうつ向いているカナタをサタンが急かす。やは

り子犬っぽい。

「……………空嶺力ナタ、生徒会執行部所属……………」

一分くらいして口を開いた力ナタはそれだけ言うとすぐに沈黙。それを聞いて唇の端をニツとつり上げると、サタンは力ナタの頭を軽く叩いた。

「上出来。……………でお前は？」

最後の言葉が自分に向けられたものだということに、少女はしばらくしてから気付く。慌てる少女を手で制すと、アズミがおもむろに言った。

「そんなに慌てなくていいよー。やまとなしょうじ大和名照詩子さん」

「えっ！！なんで私の名前……………」

驚きを隠せない少女にアズミはさらりと続ける。

「生徒会規約その一、全校生徒の名前と顔を覚えること。……………数少ない生徒会の義務みたいなものの一つだから気にしないでー？このバカは例外だけど」

「誰が馬鹿だ誰が」

「あれ、自覚なし？」

「ないわけじゃないがお前にだけは言われたくない！」

「何よー、わたしより頭悪いのは事実でしょ」

「だから嫌なんだ！」

「む、こんな美人な幼なじみに言われて嫌なら、誰にだったら言われていいの？」

「美人で幼なじみなのは認めるが自分で言っな」

「にゃーんーでーすーとー！？小さい頃泣き虫だったくせにー！」

「げっ、何言って」

「ほかにもー……………」

「やめろー！！」

他人をそっちのけにして口喧嘩を始めた二人に、おろおろと戸惑う少女。かなり気が動転しているようだ。

そんな彼女の耳にコツコツという音が聞こえた。音のする方を見

てみると、カナタがボールペンで手の平サイズの手帳を叩いている。そこには達筆な文字でこう書かれていた。

『気にしなくていいので、自己紹介してください』

「でも……」

小さな呟きを聞き取ったのか、手帳に何か書き加えるカナタ。再び手帳が向けられたときには新たな一文が増えている。

『話し始めたら勝手に止まります』

その言葉でようやく決心したのか、やがて少女は勢いこんで言った。

「一年し組の大和名照詩子といいます！ ショウコとお呼びくださいっ！ 今回は“万屋”の皆さんにお願いがあつてきました！！」

するといつの間にかアズミとサタンは姿勢を正していた。かなりの早業である。……カナタは椅子ごと少し離れていたが。

ついでに言っておくと、テールには右からアズミ、サタン、カナタの順に座っており、カナタの対角線、つまりアズミの正面にショウコが座っていた。こんなおかしい配置にしたのはカナタをショウコから離すためである。変な意味ではなく。

「あの、自分たちでこう言うのも難んだけど……わたしたちでいいの？」

言いにくそうに言葉を紡ぐアズミに、ショウコはきょとした目に向けた。

「……もしかして、生徒会のことあまり知らないのか？」

「………はい」

サタンの問いかけに恥ずかしそうにうなづくショウコ。アズミはなら仕方ないか、と笑ってから説明を始めた。

「簡単に言くと生徒会——通称“万屋”は執行部、情報部、事務部に別れてるの。そのうち各学年ごとに一年団、二年団、三年団っていうまとまりがあつてそれぞれの学年の頼みを聞いている。あ、各学年団は執行部員が六人、情報部員が四人の計十人で構成されてるよ。事務部はまた別」

そこでアズミはあ、と溜め息をついた。

「でもねー、実は一年団は色々と問題があつてね……。わたしたちのチーム、ほかの一年チームに嫌われてるの」

「え？」

「周り見てくれる？」

言われるままに辺りを見渡すと、広い食堂の真ん中あたりにいる四人の周りには半径五メートルほどの空間ができていた。それだけ離れている人々でも、サタンやアズミと視線が合いそうになった者は逃げるようにその場を立ち去っている。

「どうして……？」

「……俺にしてみれば俺たちの噂を知らないお前のほうが不思議なんだが」

サタンが唐突に口を開いた。だがアズミも同意見らしく、何も言わなかった。

「すみません」

「謝らなくていいの。……まあこんなになつてる理由はその二人が色々と有名だからなんだよ」

「アズミ、さりげなく自分を外すな」

「まあ何で有名かはおいといてー」

アズミの言葉に鋭く口をはさんだサタンだがスルーされた。少し不憫だ。

「そんなこんなので、わたしたちはほかのチームに協力してもらえないんだ。だから依頼の解決にも時間がかかる。今までだって先輩たちに手伝ってもらつてたし……」

「構いません」

寂しげなアズミの台詞を遮ってシヨウコが言った。

「一度頼んだことをそんなことだからって引き下げるなんて嫌です。そんな理由、私は気にしません！」

その言葉に三人はかなり驚いたように見えた。相変わらずカナタは表情が見えないのでよくわからなかったが。

落ち着いたらしいアズミが満面の笑みを浮かべて、シヨウコを促す。

「じゃあ、どんな依頼か話してみて？」

少女はうなずくと、ゆっくりとその内容を告げた。

「実は……この学校に伝わる恋愛七不思議を探してほしいんです」

「「れんあいなふしぎ？」」

「……………」

サタンとアズミが思わず聞き返し、カナタはやっぱり無言だった。

3・依頼内容

「恋愛七不思議って、あの？」

「なんだそれ？」

「……………」

上から順にアズミ、サタン、カナタ。またしても三者三様だが、そもそもカナタは喋っていない。

「え、知ってるんですか？」

だがその様子が一番驚いたのは依頼人であるシヨウコのようだった。知っている人物がいるとは思っていなかったのだろう。

少し得意げにアズミが笑った。

「とーぜん。わたしたちはこの学校のことならなんでもござれ、の“万屋”だよ？これくらいのこと朝飯前っ！…………ちよつと言い過ぎたかな。まだ噂程度だし」

最後のほうがわずかに自信なさげだったが、とても魅力的なその笑みに思わずシヨウコの口元はほころんだ。

二人の美少女が笑いあっている光景に、遠巻きに様子を伺っていた生徒たちもみとれたように会話を中断していた。主に男子だったが。

「俺たちのことは無視か？」

「無視じゃないよー。ただ仮にも“万屋”の一員がそんなことでよくやってけるなあ、って思ってるだけだよ」

サタンが呟いた抗議に対し、アズミは容赦ない言葉を浴びせかける。笑顔のままなのでかなり怖い。

「あ、いや…………俺たちは情報部じゃねえんだし、知らなくても別に俺たちじゃないでしょ」

サタンは咄嗟に弁解しようとするが、その言葉によって遮られた。カナタは知ってるよね？」

「……………」

アズミの問いかけ。わずかな時間が過ぎてからカナタはゆつくりと首肯した。

「確かカナタは執行部だったよねー。でもどこかの誰かと違ってちゃんと知ってたなあ。なんでだろうね？」

明らかに嫌味を込めてアズミが言う。

「知ってたとしてもカナタは例外だ！つかカナタは喋れ！」

「……………」

「はあ……………」

そうは言ったものの、無言で顔を背ける友人に無理矢理何か言わせるでもなくサタンは溜め息をつきアズミとシヨウコに向き直った。「で、結局その『恋愛七不思議』とかいうのは何なんだ？」

「あれ？珍しく素直だねえ。……まあわたしも細かいことまで知ってる訳じゃないし、シヨウコさん説明お願いできる？」

「えっ！」

啞然と三人のやりとりを見ていたシヨウコはアズミに声をかけられて我に返ったらしく、大きく目を見開いた。

「依頼するってことは何か知ってるんだよね？教えてもらえないかな？」

「は、はい」

若干とまどっていたシヨウコだが、やがてゆつくりと口を開いた。

「えっと、恋愛七不思議というのは名前の通り恋愛に関する七不思議、と言うより七つのおまじないのことなんです」「おまじない？」

「はい。いつからかは分からないんですけど、かなり昔からこの学校には恋愛成就のおまじないの噂があったらしくて、その七つのおまじない全てを行うことができれば100%告白が成功するんだそうです」

「へえ……………」

本当に初耳だったらしくサタンがわずかに驚きの声を上げる。

「サタン、興味あるの？もしかして好きな人がいるとか」

「いねーよ。……つまり、そのおまじないとやらを七つ探せばいいんだな？」

アズミの邪推を面倒そうに否定すると、サタンはシヨウコに尋ねた。

「はい。といってもその七つのうち六つは友達から教えてもらったので最後の一つだけなんですけど。知り合いの女子生徒全員に聞いてみても知らないらしくて……」

「そう、じゃあシヨウコさんの依頼は『恋愛七不思議の七つ目を見つける』でいいんだね？」

最後にアズミが確認を取ると、彼女は静かに頷いた。

何となく違和感を覚えたサタンがふとカナタをうかがうと、じつと（目が隠れているので本当は分からないが）シヨウコを見つめているようだった。そんな二人の様子に気づいているのかいないのか、アズミは別の質問を続ける。

「んー、調査始めるにしてもヒントもないんじゃないかな。シヨウコさん、参考までに恋愛七不思議のうちの六つ目まで教えてくれないかな？」

「いいですよ」

「じゃあお願い」

「はい」

シヨウコは話し始めようとしてからふと気付いた。

「……メモとか取らなくても大丈夫ですか？」

「だいじょーぶ、大丈夫。わたしとカナタがいるしね」

「平気だろ、カナタがいれば」

アズミとサタンがやけに自信たっぷりと言った。

「……………ん？」

数秒後、自分ともう一人の台詞が一部違セリフうことに気付いたアズミは、さらに数秒思考してからサタンに振り向き微笑んだ。

「サタン」。わたしは？」

「で、一つ目は何なんだ？」

先程の仕返しか、そのことについてサタンはスルー。

「ねえったらー」

「えっと……」

「メモは必要ないから始めていいぞ」

二人の顔を見比べて戸惑うシヨウコをサタンは促す。どうやら徹底的に無視するつもりらしい。

その証拠に、顔は完璧にシヨウコに向けられているし視線さえ向けようとしない。

すると突如アズミが立ち上がった。

嫌な予感がしたのか隣に座っていた少年が腰を浮かすより早く少女は椅子の後ろに回りこみ——ヘッドロックをかけた。

驚いて固まったシヨウコをよそに、サタンの首を絞めながらアズミは笑顔のまま言う。

「わたしを無視するとはいい度胸だねーサタン」

「ぐ、げ、やめろ、アズミ、俺、が悪、かった……!」

もがく少年に対しさらに力をこめる少女。なかなかシユールな光景が展開されている。

「そんなー、サタンのー、度胸にー、免じてー、ちゃんとー、もう一回ー、謝ればー、許してー、あげましょー」

「……………」

「あれ、サタン？」

「……………アズミ。もう落ちてる」

え、と少年の顔を覗きこむと、カナタの言った通りサタンはすでに気絶していた。白眼をむいていてかなり怖い。

「あっちゃー。またやっちゃった」

今とても恐ろしい発言が混ざっていたような気がする。というかさっきの力の込め方からして気がするでは決していないが、シヨウコはそれを忘れることにした。

さわらぬ神にたたりなし。

シヨウコだけでなく、遠巻きに見ていた生徒たちの考えはこの一瞬おそらく一致していただろう。

「シヨウコさん、一つ目は何？」

ぐったりした少年を椅子にもたれかけさせ終えると、何事もなかったかのようにアズミは尋ねた。その台詞がサタンが言ったものと似ていたのは故意か、はたまた偶然か。

とりあえず、シヨウコは何も聞かないことにしておいた。

3・依頼内容（後書き）

更新遅いです。読んでくださっている皆様すみません。

次回からは完全に視点が一人称で進んでいきます。予定ですけど。

4 ・その後の会話（前書き）

今回少し短いです。

4・その後の会話

遠くから声が聞こえたのでそつちを見ると広い川の向こう側で手招きしている母方の祖父がいた――

「ぐ、くるし……。つかうちのジジイはまだ死んでねえよ！」

「あ、……………起きた」

――ところで息苦しくなって目が覚めた。ついでに勢いよく椅子から飛び起きる。誰だ人のジジイを勝手に殺した奴は。……………あ、俺か。

にしても何で息苦しかったんだ？

――べちゃり

起き上がった反動で顔にのっていた何かがテーブルの上に落ちた。ひよい、とそれを摘まんでみると、

「濡れタオル？」

なんでこんなものが顔の上に？しかも限界まで水を含んでいたらしく、水滴が服をべっしりと濡らしていた。

現在の状況が分からず辺りを見回してみると右隣に濡れタオルを構えた人物が。

あ、と驚いた顔の少女と目が合う。

「犯人はお前か？」

犯人（推定）に問うと一瞬目を逸らした。

「犯人はお前だろ」

「ち、違うよ。カナタだって」

犯人（ほぼ確定）の弁明を聞き左隣の友人の様子を伺うと、

「……………！！」

すごい速さで首を横に振っていた。

「もう一人の容疑者は犯行を否定している。よって犯人はお前に決定」

「何その論理！？」

「犯行理由を十秒以内に述べよ。まともな理由なら許さんこともない。一二三以下略十」

[illegible]

「あんた何様!？」

「理不尽すぎる！それに女の子に手をあげようっての？」

生物学上どうかは関係ない。

仕方ねえなあ。

「で、犯行理由は」

「はあ、善意？どんな善意なら人を窒息させようとするんだよ」

濡れタオルで口と鼻が完璧に塞がれてマジで窒息死寸前だった。なんせジジイ（生きてるけど）が川の向こうで呼んでたし。あれ？生きてる人が川向こうにいたなら俺がいた方はあの世になるのか？じゃあ俺は死人か？そっぴいやまずあんな夢見た原因はヘッドロックのせいかもしれないんだし。結局はアズミのせいなんだし。

「え？いや、あのさあ、話終わってショウコさんも帰ったんだけど起きなかったからさ……………呼吸止まったら起きるかなって思って」「呼吸止まったら死ぬとは考えなかったのか？」

「それは……………もちろん考えたからこそ実行したに決まってるじゃない！」

確信犯ということが発覚。

「制裁発動」

ぺしり。

「いたっ！……………うう、普通ホントに殴る？」

「俺は有言実行だ。それに殴ってねえ」

軽く平手ではたたいただけだ。誤解を招く発言は止める。

「で、カナタはなんで止めなかったんだ？」

「……………止めれなかった」

「なんで？」

少し笑いながら言うとかナタはビクツと震えた。そんなに怖がらなくても。

「……………アズミが」

「あ？」

「アズミが『止めたらヘッドロック』って言った」

「アズミサン、コレはいったいドウいうコトなのでしょうカ？」

おお、アズミが面白いくらい怯えている。俺そんなに変なこと言ったかなあ。ただめずらしく敬語をつかったダケなんだガ。

「ご、ごめん！ホントうまく呼吸止まったなあかと思ってごめんなさいー！」

「本心暴露しながら謝るな。しかも本気で殺す気だったのかよ……」
怒る気力も失せたんで、立ち上がって椅子の後ろに置いていた鞆を肩にかける。服が濡れて冷たいがそのうち乾くだろう。

「あれ、サタンどうしたの？」

アズミが不思議そうに聞いてきた。

「あのなあ、依頼受けたんだから生徒会長に報告するんだろ？」

「あ、忘れてた」

……… 本当に忘れていたらしい。そんな、そっぴやそんなこともあつたなあって顔で言われても。

「ん？てことはお前、報告に行くから俺を起こしたんじゃないのか？」

「あ」

……… とりあえず、今度は殴っておいた。もちろん手加減はしたが。

4 ・その後の会話（後書き）

感想・評価等していただけると幸いです。

5・会長と副会長（前書き）

今度は長い。

5・会長と副会長

ところ変わって中央本館四階東、生徒会室前。

「なあ、俺急用あつたの思い出したから帰っていいか？」

返事を聞く前に回れ右。片足を浮かしたところで両腕を後ろから掴まれた。

「ここまで来ておいて逃げるなんて許さないよー。ね、カナタ」

「……………」

左腕を掴んだうえに捻り上げて逃走を不可能にしたアズミと、

右腕を掴んで隠れた目から鋭い眼光を発しているカナタ。

アズミが暴力的なのはいつものことだがカナタの髪の間隙からわずかに覗く目が怖い。蛇に睨まれたカエルっていうのはこういう状態のことを言うんだなあと身をもって実感。

なんでこんなことになったのかと言うと俺が逃げ、いや戦略的撤退を行おうとしたところを二人に捕まったせいなんだが、俺がそれを実行しようとしたのには理由がある。

「いや、あのさ。これを見たなら帰りたくなるのも分かるだろ？」

「確かにそうだけど、それとこれとは話が別」

言い訳、もとい抗議もあつさり返された。

俺が言った『これ』ってのは生徒会室の入口のドアに貼り付けてある貼り紙のことで、曰く

『警告：生徒会長がいます』

生徒会室なんだから生徒会長がいるなんて当たり前、とか思った奴は手を挙げる。とりあえずその窓からいっぺん落下してこい。

というのはまあ冗談で、うちの生徒会長はたまにしかない。そしてあの会長のことを説明するのに必要なのは一言だけだ。

——変人。

それだけでいい。なのに。

生徒会以外の何も知らない他の生徒たちはいろいろとアイツを持

ち上げ過ぎてる。立場的にアイツなんて呼び方本当はやばいんだが、自分で好きなように呼べって言ったんだからまあ別にいいだろう。ってそうじゃなくて、アイツのことを良く知らないから他の奴等は（特に女子は）頼ってくるんだ。

確かに、確かに眉目秀丽で頭脳明晰で運動神経抜群ではあるけれども！！

「サタン、それほとんどけなしてない。むしろ後半褒めすぎ」

「はっっ！」

アズミにつっこまれて我に返る。つーかなんで俺が考えてることわかったんだ？エスパーか！？

「さっきから全部口に出てるよ。もちろんエスパーってのも」

「……サタンの悪い癖。治さないと後で困ることになる」

う、まじかよ。カナタにまで言われるとは。実は今日始めて二十文字以上喋ってるし。

「ん？」

ふと見ると貼り紙の端っこにまだ何か書いてある。えーと……

「『本日、月読つぐよみがいないので会長の機嫌が良い。入る者はそれなりの覚悟を 副会長より』ってなあ！？」

「うそ！月読先輩いないの！？」

「……無事に帰れる？」

「ほぼ不可能に近い。ぜってーいじられる」

「どうしよう、わたしまだ遺書とか書いてない！」

「俺もだ……」

「……僕も」

「いつそのこと一回書きに帰るか？」

「さんせー！」

「……」

カナタは無言で首肯。よって賛成3、反対0のため一時撤退。三十六計逃げるにしかず。昔の人は良いこと言うなホント。

貼り紙に背を向け走り、だそうとしたところで生徒会室内から声がかかった。

「その入口で漫才してる三人、早く入れ」

とつても不機嫌そうな声。半音以上低くて誰なのか判別がつきにくいがまあ副会長だろう。

「……はい」

逃げるに逃げれなくなったので、俺たちは（かなり嫌々ながら）大人しく部屋に入ることにした。

「ああ、紅宮さんに夜凧さんに空嶺さん。お久しぶりです。そろそろ高校の生活にも慣れましたか？」

入口の真つ正面、広い室内の一番奥に設置された立派な事務机に着いている人物は、俺たちが中に入るとすぐに声をかけてきた。

アズミは無表情であるように努めているがうんざりしている様子だ。俺もそんな感じだが、カナタは無表情を通り越して能面みたいになっていた。

「……お久しぶり、と言っても一週間ほど前の招集日^{あまてらす}に会ったばかりだろう。挨拶としてはおかしいぞ、天照」

無言の俺たちを見かねたのか、不機嫌さを抑えて言葉を返したのは別のデスクでノートパソコンを操作している男子生徒。それでもどこことなく棘々しい感じが見て取れる。

「いえいえ、私は生徒会の皆を気に入っているから一日でも会わないと淋しいんです。ですからお久しぶりでいいんですよ、ねえ？」

飄々とした態度と言葉で向けられた毒をかわす奥の人物。最後の台詞はこっちに向いているが俺たちに同意を求められても困る。よって無視。

「それはそうとして、クロスくん。いつも言っていることなのですが、私のことは名前で呼んでください。出会ってから丸二年、私と

君の仲でしよう?」

「誤解を生みそうな発言は止める。おれとお前の関係は万神高校生徒会の会長と副会長にすぎない。出会ったと言っても一方的にお前がおれを生徒会に引きずり込んだだけだろうが。それに他人行儀と言うならお前が先に敬語をやめる。そうしたら考えてやらんこともない」

無視されても気にも留めていないのか、会話の矛先を変えることにしたらしい。だが相手の機嫌は最悪なので、冗談もそれ以外もまとめて叩き返される。

あの飄々とした人物がここの生徒会長、あまてらすみかみ天照美神。銀色の髪に紅い瞳、美貌と言ってよい整った顔立ち、雪のように白い肌、そして頭脳明晰、運動神経抜群の文武両道。非の打ち所がないカリスマ的存在——つてなに褒めてんだ俺!

とまあ、これだけ聞くと素晴らしい人物だと言えるが名前やその美貌に騙されることなかれ、奴は男だ!!

人をからかったり、ちょっかいかけたりするのが大好きで、仕事はまったくしないくせに人を惹き付ける俺的に大嫌いな奴だ。

「サタン、それはひがんでるって言うんだよ」

「うるせえ」

アズミに小声でつつこまれた。また口に出していたらしい。

「だいたいお前は何で月読がいないと仕事をしないんだ。会長印がないと提出できない書類もあるんだ。さっ・さ・と・や・れ」

さつきからずっと不機嫌でイライラしてる男子生徒は副会長の紅みやくろす宮玄守。名字が俺と同じなのは偶然じゃなくて、俺の兄だからだ。

俺と同じくせのある髪だが、俺より大分短く色は黒い。それをオールバックにして、眼鏡をかけているので今流行りの執事っぽい印象がある。成績優秀で運動もでき、会長と唯一肩を並べる存在らしい。

だが誰に対しても丁寧な口調の会長とはまったく正反対に口があまりよろしくない。それがなければもつともてるだろうに。

「お前には言われたくないな、サタン。お前も人のこと言うより先に自分のを治してこい」

…………… どうやら口に出ていたらしい。兄貴の目がめちゃくちゃヤバイ。

アズミとカナタを見ると目を逸らされた。ひでえ。

会長を見ると何かいい感じの妙な笑顔を返された。このSめ。

「まあいい。サタン、アズミ、カナタ。何か用事か？」

気を取り直したらしく兄貴が尋ねてきた。普通最初に聞くべきじゃないのか。

「聞くのが遅くて悪かったな」

…………… もう悪口は考えないことにしよう。

「ついさっき、放課後になってすぐに依頼があつたんです。危険はなさそうだったので受けたんですけれど」

だんだん悪化していく雰囲気遮るためか、アズミが端的に用件を言った。

「ふむ、依頼は構わないけれど内容はどうなんだい？」

黙って俺たちのやり取りを見ていた会長が口をはさんだ。その瞳は新しいおもちゃを見つけた子供みたいに輝いている。——マジ帰りてえ。

「えーと、内容は……………」

会長の様子に気づいていながらもしつかりと話すアズミ。時折カナタが付け足しつつ説明は問題なく終わった。…………二人とも半分逃げ腰だが。

ともかく、気絶していた（させられていた）俺も始めて細かな依頼内容を知った。

普通は移動中に教えてもらっているもんなんだろうが…………さつきまで忘れていた。アズミとカナタが話さなかったのは俺も道連れにするためだろう。皆さんいい性格してるよホント。

会長がゆっくりとうなずく。

「わかりました。恋愛七不思議の噂は前から聞いていましたし、一度調べてみようかと思っていたところです。必要なら他の生徒会メンバーにも話を通しておきましょう」

「ありがとうございます」

こういう時だけは真面目で行動が早い、一応生徒会のトップという自覚はあるようだ。まあ滅多にあることじゃないから絶対に裏があるんだろうな。

視線を感じたのでそちらを見ると、当の生徒会長がこちらを見ていた。

「……………」

無言で返すと、急にニタリと笑った。

鳥肌たちました。それはもう一気に。嘘じゃなくです。

ばっ、と目を逸らし周囲の様子を伺うと、アズミと兄貴は細かい打ち合わせをしているらしく気づいていなかった。だが、

「……………」

左横でカナタが固まっていた。……見てしまったようだ。

その後、俺たちは（正確に言うと俺とカナタは）できる限り早く生徒会室から脱出した。

……………理由は、尋ねないでほしい。

6・寮での会話

「忘れてた」

俺たちが生徒会室から逃、もとい出てきて校門でアズミと別れ、寮の自室に入ったところで突然カナタが呟いた。いきなりすぎて何事かと思った。

さっきまでの行動からわかるように、俺とカナタは寮で生活している。同室で、高校に入ってから丸2ヶ月間一緒に暮らしているとさすがに互いの趣味嗜好なんかもわかって来るのだが、そんなこと以外にも色々知ることが出来た。

最初は入学して偶然同室になった奴が一番の友人になるなんて思いましなかったな……

「？、サタン、顔赤い」

「え、いやなんでもない。カナタこそどうしたんだ？」

……危ねえ、友人つて言葉から連想して中学の時のこと思い出しちゃった。あん時は荒れてたからなー、赤面モンだよマジで。いやー俺も若かったなー。

鞆から出した荷物を片付けながらぼつりとカナタが言った。

「ちよつと用事思い出しただけ。気にするな」

なら良いけど、珍しいこともあるもんだな。カナタが忘れるなんて。生徒会長のせいかな？うん、奴のせいに違いはない。

「あと、サタン。自分で若かったとか言うのはどうかと」

「まーたーでーすーかー！？」

なんでこうも思ったことが口に出るんだ俺！は、まさか実は俺以外は皆エスパーで俺はそんな中唯一の普通人だったり……

「しない。サタンが正直過ぎるだけ。夕食食べ損ねたくないならさつさと用意する」

へーへーわかりました。当たり前だが冗談だからそんな微妙な視線を向けるのはやめろ。というか、カナタいつもより若干言葉に棘

があるな。なんかうつすら顔が赤いし、熱でもあるのか？

「あと……」

「ん？」

「例え考えるだけだったとしても、その、一番の友人とか、そういうのは使わない方がいい」

そう言って部屋から出ていくカナタ。ボタン、と大きな音をたててドアが閉められたところで我に返る。

ああ顔が赤かったのは恥ずかしかったからであの態度は照れ隠しか……… ってそうじゃなくて。

「言ってたのか俺~~~~っっ!!」

穴があつたら入りたい、って気持ちが理解できた。できれば理解したくなかったが。

その後、夕食を食べてるあいだじゅう恥ずかしくてまた叫びそうだったが、なんとか我慢した。ギリギリだったけど。

夕食を食べ終わり、自室に帰ってきた俺とカナタ。

現在はカナタが部屋ごとに備え付けの風呂に入っている。

いや、それにしても一部屋づつに風呂付きってどんだけ豪華なんだよって感じた。もう慣れたがホテルみたいな部屋だ。

これだけ豪華なのだから寮代も馬鹿にならないはずなのだが、正確な料金を俺は知らない。ぶっちゃけ俺が特待生だからだ。

この学校にある特待生制度はかなり特殊で、学業、スポーツ、芸術、その他のなんでも良いので推薦で入学すると寮代を免除してくれる。そしてこれが一番特殊なのだが、この学校ではバイトが基本的に禁止の代わりに推薦入学生のみ生徒会に入ることと授業料を減らしてくれるのだ。この制度は理事長が

「将来有望な生徒たちが金がないからと言って勉強ができないのは

おかしい」と言って作っただけらしい。

正直感謝している。この制度がなければ今頃何をしていただろう。

ちなみに俺はスポーツの特待生だ。アズミは芸術で、カナタは学業の特待生らしい。全体の1割いるかないかの特待生だが、一つの分野で優秀な成績を取り続ける限りその権利が剥奪されることはない。よっぽどのがない限り、と兄貴は言っていたが。

ついでに言っておくと、俺の兄貴のクロスは男子寮の寮長をしている。全寮制ではないとはいえ、かなりの人数が寮生活を送っているため苦労しているらしい。そんな役職、俺なら絶対にご免だな。うん。

「サタン、何か感慨深げ？」

「うおっカナタいつの間に！」

「さっきからいた」

気付けばカナタが正面に立っていた。抑揚の少ない声でいきなり話しかけられると心臓に悪いな……

「だったらもつと早く声かけてくれても良いだろ？」

「それもそうだ、次からそうする」

今気付いたというように頷くカナタ。……わざとらしいな。

だがそんな俺の視線を気にせず、本人は自分の机で鞆から出したノートパソコンをいじり始める。こうなったらカナタは周りが見えなくなるので話しかけるだけ無駄だ。

「サタン」

「……ふあ？」

何なんだよもう、せっかく人が寝てるっていうのに。安眠妨害は重罪だぞ、公務執行妨害並と同じくらい。つーわけでムシヨ行き決定、よっておやすみなさい。

「意味不明なこと言ってるで起きる。眠いなら自分のベッドで寝る。他人のベッドを占領するな」

「えー」

「えーじゃない」

だって二段ベッドの上のにのぼるの面倒だし。

ついにかいつの間にか寝てたみたいだな。おかしなことを口走った
気がするが気にしないことにしよう。

「ん？寝るってことはまだ朝じゃないのか？」

「さっき日付が変わった」

てことは三時間ちよつと寝てただけか。まだ寝るには早すぎる。

「カナタは作業終わったのか？」

「終わった。だから寝る。けどサタンが邪魔」

ごもつともです。

仕方なく下のベッドから這い出し自分の机の椅子に座る。

入れ替わりにカナタがベッドに入り、布団にくるまった。

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

いつもながらカナタは寝るのが早い。起きるのも早いし、年寄り
かつっの。

さて、携帯でもいじりますか。生徒会員だからって強制的に持た
された物だが、今では便利な暇つぶしの道具として活用している。

メールや電話？自分からしようとは思わねーし。だから暇つぶし。

「ところで」

「うおっ！」

唐突にカナタが喋った。……寝たと思ってたから正直かなりびび
った。

「ど、どうした？」

「いや、気になったことが」

「何だ？」

寝ようとしてたのにわざわざ言っつてことはよっぽどのもんなの
だろうか。

「よく知らないけど、織姫先生がサタンはかなり宿題ためてるから、そろそろ制裁発動って」

「そついうのはもつと早く言ってくれ！」

「……今思い出した」

最近何も言ってこないと思ったら、密かに何しようとしてんだあいつ！

今からやって終わる程度の量じゃないぞ、マジで。

「そつだカナタ手伝って」

「……………くー」

「もう寝てる！？」

どんだけ寝付きいいんだよ！喋ってから五秒たってねえのにおかしくないか？

「いや今はそれよりも……」

自分の机の隅に山積みとなった宿題。これをどうにかしないと。

……………うん、まああれだね、

「ちりも積もれば山となる、ってか」

「因果応報、自業自得……………」

ん、今何か聞こえたような――

「って“ような”じゃねえよ！カナタお前起きてんじゃねえか！！」

「……………しまった」

「しまったじゃねー！！！」

この日から、男子寮では夜な夜な悲鳴が上がるといふ噂が立つたとか立たなかったとか。

6・療での会話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

7・朝の出来事

翌日。ついさっき起きた。カナタは……もういないか。

「いつもながら早いな……」

朝に弱い俺にとつてはうらやましいことこの上ない。毎日六時起きってどうやったら出来んだよ。

のそのそとベッドから下りて時計を見る。なんだ、八時四十分か。
………ん？

現在の時刻、八時四十分。

門が閉まる時刻、八時三十分。

「——思いっきり遅刻じゃねーかああ————！！！」

悲痛な叫びを上げてから五分後、俺は寮の真横にあるフェンス（ちなみに高さ四メートル半）を乗り越えて学校の敷地に入り、校舎に忍び込んでいた。

大分慌てていたため、服はパジャマがわりに着ていたＴシャツの上にワイシャツをはおり、ズボンを近くにあったジャージに替えただけだ。髪は寝癖でライオンみたいになっているが、まあ放置。どうせまともにセットしたこともないし。

今の時間は朝のHR中なので廊下には誰もいないので見つかりにくくて良い。だが近くの教室から話し声が聞こえているというのに足音が妙に響く。なんとも不思議な感覚だ。

「そっぴや最近遅刻してなかったからな……」

何故遅刻していなかったかというと、兄のクロスが登校前に叩き起こしに来ていたからだ。文字通り叩き起こしに。今日は昨日受けた依頼について調べるから、と言っていたとおり早くに寮を出たらしい。あと、いくら寮長だからといって他人の部屋の鍵を開けるな

んで職権濫用だと思うが、言ったらどうなるか予想はついているので黙っている。

「楽しそうだな紅宮サタン？」

「あー……、おはようございます織姫先生」
おりひめ

どうやらいつの間にか自分の教室前まで来ていたらしい。教室の入口に、ドアを全開にして仁王立ちしているババア……もとい、女性がいいた。

「それは褒めてるのか、それとも貶しているのか？ん？」

もはや思考が口から出ていることもスルー。そうでもしないとやってられないし。

か織姫先生の右手にはチョークの束（白×五本）が握られ――

手のひらから粉碎されたチヨークの粉が落ち、廊下と教室の床を白く染める。

俺……とりあえず笑った。

「だよなあ、そんなこと考えるわけないよなはははははははははは……」

「だが遅刻は許さん」

先生、目笑ってません……

「死ねッ！」

ばきいっ！！

うわぁ 良い音。 痛そう。 いや 実際まじ痛い。

「先生、ナイスアッパーで……」

ばたり。

擊沈。

結局、三半規管が回復し復活したのは一時間目の古典が終わり、織姫先生が教室を出てからのことだった。

と言えども平衡感覚は未だ完璧に戻らず、俺はぐるぐる回転する天井を自分の机の椅子にもたれかかり眺めていた。気持ち悪いっただけだ。ありやしねえ………ちよつと吐きそう。

と、視界に見覚え＆話し覚えがある女子が入って来た。

「おはよー。大丈夫……そうには見えないね」

「……当たり前だ。この状態を見てそんなこと言うのは目か頭が腐ってる奴くらいだ」

「いや、ポジティブな人とかなら言うかも」

「どれだけポジティブすぎるんだよ！」

「つーか今の状態でツツコミやらせんなアズミ。見た目よりかなりキツいんだぞ？」

言つておくと、アズミとは同じクラスだ。1年L組、つまり普通課全12クラスの一歩最後。ちなみにカナタはA組で特進クラス。一年生の一クラスは基本的に四十人で、普通課が12で理数課、商業課、芸術課、特別課はそれぞれ1の計16クラス。だから四十×16＝六百八十人が一学年の人数になる。

改めて考えると多いよなあ…………

「……サタン、ちよつと聞いているの？」

「ん？ああ、すまん。聞いてなかつ……………なんだその驚いた顔」

「さつ、サタンが謝るなんて……………明日はきつと槍が降るわね」

「雨や雪通り越していきなり槍かよ！つてか俺が謝るのがそんなに珍しいか！？」

「珍しい」

「……………」

断言されると逆に困る。ほんとアズミといいカナタといい、俺の扱いひどすぎないか？

「それはまあ冗談として」

「はあ……………。で何なんだ」

ため息をついて続きを促す。冗談でも言われる方はたまらないからな。

「昨日受けた依頼なんだけど、今日から調査開始することになったから」

「へえ、それはまた急だな」

「噂がかなり広まつてるみたいだから、沈静させる為にも早めに調べるように、との生徒会長からのお達しよ」

「ふーん、いつ聞いたんだ？」

「今日の朝に教室に来て、本人が直々に伝えてきたわ」

「本人が！？あのめんどくさがりが！？」

「うん。あの超めんどくさがり星人が直接」

なにげに自分の目上に対してひどいこと言ってるなアズミ。

「……………それこそ槍が降るんじゃないか？」

「それは大丈夫」

「なんで？」

「月読先輩のハイキック喰らって生徒会室追い出されたらしいから……………」

「連絡をわたしに伝えた後、そのままサボろうとしたところを月読先輩に見つかって強制連行されてたし」

「……………気に入らない奴ではあるが、そこまでやられてるとなるとちよつと可哀想になってくるな。ご愁傷様、生徒会長。成仏してくれよ。」

「ってことで、放課後になったらすぐに生徒会室に集合ね」

「おう」

アズミが自分の席に戻るのをぼんやりと眺めた後、そのまま机に突っ伏す。

「……………とりあえず昼休みまで寝るか。」

なんか忘れてる気がするんだが……………まあいいや。おやすみ。

7・朝の出来事（後書き）

お久しぶりです。11月中一度も更新していませんでした。
できる限りペースを上げるようにがんばります。

8・放課後・生徒会室にて

「……………おそい」

「……………」

現在放課後。授業終了から三十分。左隣で無言のままのカナタと二人して生徒会室に来てから二十五分。現在この部屋にいるのは…

……

「今日もいい天気だねえ、命^{みこと}。こういう日はやっぱり昼寝するに限ぐえっ！」

いつも通り会長席でふざけたことを言って蹴られている生徒会長。「限らないわよ！さっさと働きなさいこのバカ」

生徒会長に蹴りを入れている月読^{つくよみ}ミコト先輩。

「月読、あんまりかまってる調子乗るからその辺でやめとけ」

月読先輩がいるおかげか、昨日より大分気楽そうなクロス副会長。

「……………」

やっぱり無言、無表情に入口を見ているカナタ。

「……………なんでまだ来ないのサタンー！」

そしてけっこー苛々してきたわたし、アズミ。

の計五人。

……………少ない。が、それは別に問題じゃない。招集日以外で十人以上より多く人がいることの方が珍しいくらいだし。

それよりも今はサタンのこと。わたしが教室出たときにちゃんと帰る準備してたのになんでまだ来ないわけ？どれだけ片付けに時間かけてるのよ？

とはいえ、本人が来ないことには文句を言えないし、ここにいる人達のファッションチェックでもしていよう。

トップは生徒会長こと天照美神。生徒会長って呼ぶか呼び捨てにするか今も迷う人。なんでもできる完璧超人なのにダメ人間という

いろんな意味で残念な人物。顔もいいのに。

本日は高そうな黒のスーツ上下。下に着込んだワイシャツも心なしか高級品。ゼーたくな。

「アズミさん？さっきからどうしたんですか、私の顔に何かついてます？」

「はい。靴跡という名のメイクがくつきりと。すごく似合ってますよ」

机にうなだれ始めたし、あとは月読先輩に任せよう。あの人がいないとずっとサボってるだけだしね。

そうそう、ついでに言つとくと、生徒会員は事務部・情報部・執行部問わず白いワイシャツもしくはブラウスを着ることが義務付けられてる。だからみんな服がワイシャツなんだよね。一般生徒と見分けやすくするためらしいけど、あんまり意味ない。私服でも着てる人多いし。

さて、続いてはわたしが尊敬する月読命先輩。二年生で、サタンと同じ執行委員長を務める長い黒髪の美人さん。生徒会長とは従兄弟同士で、だからこそ（色々な意味で）容赦の欠片もない方。別に会長に容赦する必要はないけど。

そんな彼女は男物の白ワイシャツにワインレッドの紐ネクタイ、黒のジーンズに同色の巻スカート……と遠目に見ればギャルソンみたいな格好をしている。そしてとてつもなく似合っている。

動き易さ重視の中に女性らしさもあって、………ほんと尊敬します。

まあ男子はもちろん、わたし以外の女子からも絶大な人気があるんだけど。………みんな月読先輩の怖さを知らないからなあ。知ったらどうなるんだろう。まあ、わたしには関係ないけど。

「ねえ紅宮。この昼行灯をどうにかする良い方法ない？」

「具体的には？」

「真面目に仕事するように」

「無理」

即断即決、ミコト先輩にさえ淡々と話すのはサタンのお兄さん、紅宮玄守先輩。口は悪いけど面倒見が良くて皆から頼りにされてる。いいお兄さんなんだけど、サタンには厳しいんだよねえ……。愛情の裏返しって奴かな。

服は黒いズボンにワイシャツで、赤いネクタイが特徴的。端にある白い蜘蛛の巣のデザインがポイントだね。ちよつと不良っぽいのも似合ってて格好いい。サタンみたいにセンスが悪いのと本当に兄弟なのか疑いたくなるよ。

「……………」

うん、カナタはもう少し喋るべきだと思うよ。話しにくくてしょうがない。

空嶺彼方。高校になってできたわたしとサタンの友人。そのせいで『悪魔の参謀』って呼ぶ人もいるらしい。それに合わせてわたしを『魔女』って呼ぶ輩もいたけど、……………今はいなくなつたなあ。

まあそれはおいといて、カナタはいつも通り白黒な服を着ている。黒ズボン白ワイシャツ黒ネクタイ靴も黒。肌も白いし、きつとカラ―写真と白黒写真どっちで撮ったとしてもおんなじに見える。サタンとは対照的だよまったく。

……………ドドドドドドドドドド……………

ん？……………やつと来たみたいね。ちようどいいわ。

……………ドドドドドドドド、バンッ！！

「悪い遅れぐぎゃあっ！」

お、いい具合に入つたなあ……………回し蹴り。

しかも駆けこんで来たサタンの勢いの分威力が増したしね。だからって……………可哀想とか許してやろうなんて思わないよ？

「さて、どうして遅れたのか、たあっ！ぷり話してもらいましょうか？」

「い、いやアズミ。これにはやむを得ない事情が……………」
「ふうん」

本当のところ、別に内容によっては許してあげないこともない。
けどなあ……

「えっと……、宿題1ヶ月未提出の罰として一人で教室掃除を」

「やっぱり自業自得じゃない馬鹿サタンっ!!」

「ぎっ!?!」

わたしは静かに笑いながら、座りこんでいたサタンに——ラリア
ット。

「げえっ!!」

続いて、腹に——踵落とし。

「ぐぎゃっ!」

よし、決まった——アッパー。我ながらにいい角度。

「……ぶうっ」

ズドドドド、がらがらばたん!

「ちよっ、サタン君大丈夫?!」

少し離れたところで何かが激突して崩れる音と、月読先輩の声が
聞こえるけど気にしない。しないったらしない。

「……アズミ?」

「え、カナタ何?」

今日生徒会室（こい）に来てから初めて喋ってるし。自分から話しかける
なんて珍しい。

「……サタン、全部じゃないけど宿題やってた。だから三十分遅れ
た」

「どういうこと?」

「……つまり、少しでも宿題したから掃除だけですんだ。本当に1
ヶ月出してなかったらもつと遅い」

えっと、それは、その……

「……わたし、やりすぎた?」

こくりと頷くカナタを見て、大きく息をつく。そのままサタンを
殴り飛ばした方向を向いて——机に埋もれて足だけ突き出して

るサタンの姿を見て……

「また、やつちやった」

……どうやって言い訳しよう……？下手なこと言つと
ヤバイ、よね。

とりあえず、心の中で謝っておくことにした。

8 ・放課後・生徒会室にて（後書き）

今回はアズミ視点でお送りしました。次話はサタンに戻りますが、時折別の人の視点で書くかもしれません。

9・放課後・行動開始？

「うう………あ」

目蓋を薄く開けると、白く眩しい光が入り反射的に目を閉じた。首と腹と顎がやけに痛い。むしろ身体全体も痛い。ズキズキズキする。一体何があった？

「——いつてー………」

「あ、サタン君起きた？」

すぐそこで声がしたのでもう一度、今度はゆっくり目を開くと、長い黒髪の女性が視界に入った。どうやら、俺はどこかに横になっているところを覗き込まれているらしい。らしいが………近い。顔が。

いやホントマジで近い。なんかまつ毛も数えられそうなくらい近いんですけど。何か動くに動けないしつか動いたらヤバイ距離なんだよ俺にどうしろっていうんだ！？

「……月読先輩近すぎです！！」

天の助けが来た。

視界の片隅でアズミが慌てて寄ってくる。なんでそんなに焦ってるんだ？でもよくやった！

「え、ああごめんね」

そう言って月読先輩が身を引いた。ようやく顔が離れ、俺は半分止まっていた呼吸を再開させる。ヘタレとか言うな一瞬心臓止まるかと思っただんだよ。

「………先輩。何やってたんですか」

一息ついてから上半身を起こし、月読先輩に問いかける。後輩の顔を至近距離で覗き込むなんて、ないとは言い切れないとしてもそうあることでもないだろう、普通。

「いや、改めて紅宮とサタン君はそっくりだと思って。ぱっと見あ

んまり似てないけど、良く見ると目とか髪質とかおんなじ」

………そうか？むしろ正反対だと思っただが。兄貴は口悪いけど頭いいし冷静だし。口悪いけど運動もできるし。口悪いけど。

「そうじゃなくて。………でも性格も似てるよ。頼りになるところや、優しいことかね」

う、先輩がすっごく嬉しそうに笑いかけてくるから真っ直ぐ顔が見れない。絶対顔赤くなってるなコレは。うわ、めちゃうちゃ照れるし恥ずかしい！

………そっぴやさっき先輩地味に俺が考えてることに答えてたよな。また声に出してたのか……。そろそろマジで心配になってきた。今なら

「実はあなた以外全員テレパシーを使えるんです」とか言われたら信じる気がする。

ごまかすように辺りを見回すと、左側の椅子に座りこんできたアズミと目が合った。どうも俺は生徒会室にある応接用のソファに寝ていたらしい。というか………なんでジト目なんだアズミ。俺が何かしたか？

「………デレデレしちゃって気持ち悪い。変態」

「デレデレなんてしてねーよ！………そりゃ、ちょっとは嬉しいけど」

嬉しくない訳がない。月読先輩は一般的に、いや誰が見ても美人だと言う顔立ちをしている。ていうかさっきの状況で何も感じない平気だって言えたらそれはそれで健全な男子高校生として何かおかしいと思うのは俺だけか？

だがアズミはそうは思わなかったらしく……

「うわ、やっぱり変態だ。ねえ、カナタ？」

あれ、カナタ居るのか？見回した限りいなかったと思ったんだが。ぼんやりしてたからかな。

「？…カナタ？」

アズミが不思議そうに俺の右後ろのほうを見た。俺も振り向いて

そっちを覗く。誰もいな……

「うおわっ!？」

「……………や」

ソファの背もたれから顔を出したカナタと頭をぶつけそうになる。今にゆっ、って出てきたよな。にゅって。や、とか手上げてんじやねえよ。気配しなかったぞ!？」

「……………サタン、大丈夫？」

「へ、何が？」

「……………頭とか身体とか？」

いや、疑問系で返されても困るんだが。頭が大丈夫じゃなかったらヤバいだろ……………って、言われて思い出した。驚きすぎて忘れていたが身体じゅうが痛い。地味ーな痛みからなんかが一気に押し寄せて来る。我慢できないほどではないが……………なんで痛いんだ？

「つつ…………。大丈夫っちゃあ大丈夫だ、一応。んで、俺はどうしてこんな所で寝てたんだ？身体も痛いし」

確か宿題未提出の罰に教室掃除やらされて、急いで終わらせてから生徒会室に駆け込んで……………んで気付いたらこの状況だ。訳がわからん。

「……………それは」

「さ、サタンは気絶させじゃなくて気絶してたの!ここのドアのこの段差に引っかかってこ、こけて!そのあと運悪く椅子と机に突っ込んで頭を打ったから!だ、断じて首とか顎とかに攻撃を食らわせいや食らったからじゃないよ!？」

カナタを遮るようにアズミが俺に迫りながら言った。机に突っ込んだんだなら気絶してもおかしくないな。にしても、そんなに慌てて言わなくても良いだろ、しかも後半意味不明。首と顎に攻撃ってどんなことが起きたらそうなるんだよ。

「そ、そうだよ。あはははははは」

また言ってたか……………あ。……………なんで急いでたか思い出した。「アズミ、遅刻して悪い!」

「い、いいわよそんなこと！気にしないで！」

そうだよな、あれだけ言われてたんだし許してくれるわけ……え？

「い、いいのか？俺の自業自得で遅れたんだぞ？」

「いいつたらいいの！少しはやったこと、カナタから聞いたし。…

……それにやり過ぎたし」

「それに？」

「何でもない！」

そうか？ならいいんだが……正直許してくれるとは思わなかった。怒鳴られる、もしくは殴られると思ってたのに、不思議なこともあるもんだ。

「紅宮さん、夜風さん。お取り込み中のところ申し訳ないんですが、よろしいですか？」

ばっ、と振り返ると、いつも通りの会長席で微笑みながらこちらを見ている生徒会長と目が合った。うわ最悪。

「お話しあいはいはそれくらいにして、大和名さんを迎えに行ってくださいませんか？詳しいお話をうかがいたいです」

口調は丁寧だし仕草も優雅だが靴跡が顔にくつきりついているから威厳とか欠片も感じないな。なにがあっただんだか。

「はいはいわかりました」

まあ、言われた通り大和名を迎えに行くか。

ソファから立ち上がり、何故か顔がひきつっているアズミといつもながら無表情なカナタと共に生徒会室を出て戸を閉める。二人の顔見比べると面白いな。

あれ？……………って、

「どこにいるんだよ！？」

「あ、場所言っの忘れてました」

10・“万屋”の仕事（前書き）

今回は長めです。

10.“万屋”の仕事

んで、会長から聞き出した場所へ向かった。つーか昨日行った食堂。聞かなくても別に良かったかもな。でも間違えたら恥ずいからなー。

そんなこと考えてる間に中央本館食堂こと本食に到着した。あ、間違えた。本食こと中央本館食堂だな。

「えー、サタンくんが盛大に独り言を言っていますけどうしましゅうかカナタ？」

「……………どうもしない」

「淡泊な反応ありがとー。じゃあ放置で」

いやそこはちゃんと指摘しろよ！放置プレイか！？っていうか丸聞こえなのわかってて言ってるだろうお前ら！……………はあ、もしかして俺何も考えないほうがいいのか…？

「あれ？サタンくんどうしたの？」

とても白々しくアズミが問いかけてくる。ー我慢しろ俺。こんなことで起こってたら意味ないぞ。いつものことだいつもの。

「いや、なんでもない」

「そう？」

「…あ」

いきなりカナタが声を上げた。いや、どっちかって言うと声が漏れた、か？俺とアズミの会話よりも小さかったし。まあそんなことどうでもいいとして……

「どうしたカナタ。なんか変なものでも見えたのか？」

「……………見えてない。でも、変じゃないけど……………」

「けど？」

「…あれ」

すっ、と動いたカナタの指先を視線で追うと、食堂の隅に座っている大和名を見つけた。

「あ、シヨウコさん」

「大和名がどうかしたのか？カナー」

と自分で尋ねてから大和名の様子がおかしいことに気づいた。いや、おかしいと言うよりも困っている、の方が正しいか。そしてその原因は十中八九……周りにいる数人の男子生徒のせいだろう。

「うわ、ナンパ？学校内なのによくやるわ。……この場合はさすが一年生トップクラスの美少女、って言うべき？」

言わないだろ普通！とまあ、アズミが言ったように大和名はナンパされてるようだった。一応同じ学校の生徒だし、ナンパって言うのもどうかと思うが。

にしても大和名囲んでる奴ら、見た目的にめちゃくちや軽そうなのばかりだな。茶髪、金髪、ピアスにジャラジャラしたアクセサリーと、全員似たり寄ったりな格好だし。個性のないことで。

「サタン、行くわよ」

「行くって、……やっぱり？」

「もちろん！さあ、治安の維持も“万屋”の仕事よ。ちゃっちゃんとついて来る！」

「へいへい」

「カナタもちゃんと来なさいよ」

「……………」

こくり、とカナタが頷いたのを見てからアズミは大和名の方へと進んでいった。仕方がないので俺とカナタはその後ろについて行く。

……………絶対、厄介事になるぞこれ。

「そこのお兄さん方。その子困ってるじゃないですかー。離れてあげてくださいよ」

誰！？って毎回思うが、さっきのはアズミだ。のんびりした感じの猫かぶり、いつもながら見事だな。

「なんだよ、邪魔だ……」

「お、この子もかわいいじゃん」

「ねえ、よかつたら君も一緒に遊ばない？」

かかった。男子生徒たちが大和名からアズミに意識をむ始めている。

ちなみに俺は少し離れたところからそれを見てる。臆病だとか面倒だから逃げるとかじゃないぞ、これがいつものパターンだからだ。

「お断りしますー。わたし、用事がありますので」

「そんなこと言わずにさあ、なあ？」

「そうそう、いいでしょ少しくらい」

「ちよつと、やめてくださいー！」

茶髪男（さつき命名）がアズミの腕をつかむ。そろそろだな。

カナタに目配せすると、小さい頷きが返って来た。それを確認し、俺はアズミとナンパ男軍団に近づく。

「……おい」

「あん？なんだお前？」

「邪魔すんなよ」

「引っ込んでろ、よ……？」

「どうした？俺の顔に何か付いてるか？」

そう言いながらさらに近づくと、俺を凝視してたピアス男（これも今命名）が俺を指差しながら一歩後ずさった。ったく、人を指差すなって教わらなかったのか？

他のナンパ野郎たちが驚いたようにピアス男に声をかける。

「おい！どうしたんだよ！」

「あ、あああ、あ、『悪魔の』、『暴君』……！……！」

それは間違いなく俺に向けて発された言葉で。

辺りが一瞬、静寂に包まれた。

「『悪魔の暴君』……？……紅宮サタン！？」

「………ってことは、生徒会か！？」

「ご名答」

へえ、俺も有名になったもんだ。一発で名前が出てくるとは思わなかったな。

「気付くの遅すぎですよ兄さん方」

アズミがあっさり頷く。それを見て拍子抜けしたのか、ナンパ男

「今日は迷惑行為取り締まり強化月間です。ちゃんと最初に注意したんですから、やめてくれないと困ります」

「そつ、そんなの生徒会には関係ないだろ！俺たちの自由だ！」

「だいたい俺らが誰かもわかんないんだし、取り締まりようがねーだろ！」

「まあ、普通はそうですね」

アズミはあっさり頷く。それを見て拍子抜けしたのか、ナンパ男たちは気持ち悪い笑みを浮かべた。かなり気色悪い。

「だったらさつさと帰れよ。ほら！」

ナンパ男の一人がアズミを突き飛ばそうと腕を伸ばし――

「……二年F組、わくすきの和久杉乃」

――動きを止めた。

「な……！？」

驚きに固まるナンパ男――和久を無視して、カナタはまた口を開いた。

「……二年F組とりのいわや鳥野岩谷、二年H組かなやま ひゅうご金山飛羽吾……」

「……！！！」

「……二年J組はしややす波邇屋康……」

「つ、て、てめえ！なんで俺らの名前知ってやがる！？」

胸ぐらをつかんでこようとした茶髪男・鳥野の手を捻り上げ、そのままの体勢で答えてやる。

「“万屋”だからに決まってるだろ」

ぱつ、と手を離すと――は鋭い目つきで俺たちを睨んできた。何もしないのは賢明だな。まあ……もう手遅れだが。

「ちなみに状況証拠はばつちりですから、何をしても無駄ですよー」

アズミの声を合図にカナタが右手を開き、手のひらに収まっていた小型のデジカメを取り出す。あの中には最初大和名が取り囲まれてるところからアズミが腕を掴まれてる光景、加えてさっき俺に掴み掛かるうとしていた部分の写真が収められているというわけだ。これがある限り、ナンパ男たちは言い逃れできないからな。

「くそっ……！」

とっさに金髪男・金山がカメラを奪おうとしたが、カナタは素早い動きで俺にカメラを投げた。ぱしり、と小気味良い音とともに俺はそれを受け止め、ポケットにしまい込む。

「で、どうするんだ。俺らは優先してやらなきゃいけない仕事があるから、今なら見逃してやってもいいが？」

例え相手が年上でも、相手に非があるなら下手に出る必要はない。……つっても俺は誰に対しても大抵この口調だから今さらなんだがな。

「……ちっ、行くぞ」

「あ、ああ」

「……おう」

「……じゃあね、可愛い子ちゃん」

古っ……！

多分ここにいる全員（傍観者含む）が同じことを思っただろうが、誰も口にはしなかった。もちろん俺も。誰だって余計な波風はたてたくない。つーか和久とかいうやつあからさまに舌打ちしやがったな。ま、それくらいじゃキレたりしねーけど。

つと、なんか他の三人が波瀾屋を引つ張り小声で話してるな。

「お前何言ってるんだよ！」

「いや、だってあの子かわいいでしょ」

「確かにそうだが、よく考えてみる！『悪魔の暴君』と一緒にいる女だぞ！？」

「え、つてことはもしかして……『魔女』？」

ぶちん、と何かが切れる音がした気がした。何かが切れる音がし

た気がした。もちろん空耳なんだが、何かが切れたのは間違いない。なぜなら……アズミが音もなくナンパ男たちに近づいて行ったからだ。

「ちよつと」

「ああ？なん……」

「誰が『魔女』だつて？この×××××が」

「……………え？」

波邇屋に声をかけたアズミは、完璧に切れてるようだった。——ご愁傷様、としか言いようがないな。知らなかったんだろぅが、アズミに『魔女』は禁句だぞ。なんでかはよく知らないが。

「×××××が　　のくせにこの□□□□野郎」

「○○○○は▲▲▲▲つてこと知らないと思つてんの×××××
×」

「さつさと取り消しなさい　　！」

……………うわ、もう聞いているだけでこっちまでツライものがある。むしろ聞きたくねえ……………

やっぱり、余計面倒事になるんだな……………

数分後、大和名と並んで座る俺とカナタのところに戻ってきたアズミは、とても晴れやかな顔をしていた。

「シヨウコさん、待たせてごめんなさい」

「え。いえ！助けていただいてありがとうございます」

「どういたしまして」

……………あの直後に普通に会話を始めるなんて……………恐え。

「あ、情報提供ありがとうカナタ。さっきの奴らもこれで当分懲りたでしょ」

「……………」

無言で頷くカナタ。……………お前も絡んでたのかよ！

こんな調子で大丈夫か？この依頼……

10・“万屋”の仕事（後書き）

けっこう早めに更新できました。でも、あまり更新できないのは変わりません。

感想・評価等いただけると嬉しいです。

11・調査一日目

場所は変わって、現在俺とカナタ、大和名は廊下を歩いてた。つまり生徒会室まで大和名を案内する途中なわけだ。アズミがいなのは用事があって先に戻ったからだが……………正直、行かせるんじゃないかった。

三人で歩いている、ということは俺とカナタっていう男子二人と大和名っていう女子一人が一緒にいるってことだ。つまり…………俺らに視線がめちゃくちや集まってる。しかも現在進行形で増えてるし。視線だけじゃなくてこそそと話してる奴もいるし。あからさまに睨んでくる奴らもいるし。カナタはいつも通りに見えても視線が集中してるせいでなんか動きが機械的だし大和名はこの状態を全く理解してないみたいでゆっくりのんびり歩いているし……………！！

そりゃ美少女が男二人連れてる光景は珍しいだろうし、そのうちの一人は茶髪で目つきが悪いんだから気にもなるだろうけど！はつきり言おう、……………うつとうしい！！

と、俺らを見ていた奴らがいきなり視線を逸らし、立ち去り始めた。…………口には出してないはずだよなあ？

「……………サタン、気配がすごいことに……………」

「へ？」

「……………殺気が……………」

うわ、やつべ。つい前の癖で殺気だしちまった。昔っから変に注目されるのって苦手だからな…………。でも苦手かだけで殺気出すってどれだけ危険人物なんだ俺は。

「え、どうかなさったんですか？紅宮さん」

って大和名！お前は今の殺気にも気付かなかったのか！？俺らの半径五メートルに人がいないことで何か察してくれ！人によつたら十メートル離れてたけど逃げた奴もいたるのに、なんで一番近くにいるお前が分からないんだ！？カナタなんか今にも逃げ出しそうだ

つたぞ!?

……とはいえ、んなことを正面切って言えるはずもない。気付かずに言つてたら色々アレだが。

「……いや、なんでもない。それよりも大和名」

「何ですか、紅宮さん？」

「それ、その『紅宮さん』っていうのやめてもらえるか？俺の兄貴も生徒会にいるから、名字だとややこしいんだよ」

さっき呼ばれたときに思ったんだが、生徒会室に行ったら紅宮が二人だからわかりにくいだろう。それに俺は紅宮って呼ばれるのに慣れてないから反応しにくいしな。

「だから、サタンでいい」

「わかりました。あ、じゃあサタンさんも私のことシヨウコって呼んでください」

「え、いいのか？」

「はい、もちろんです!」

確かにそっちのが呼びやすいっちゃあ呼びやすいんだが、会ってそんなにたってない女子を名前で呼ぶのは気がひける。まあ、本人がそう言ってるんだから呼ばないのは逆に失礼だろう。にしても名前にさん付けてすげえ違和感があるんだよなあ……

「……わかった。じゃあシヨウコって呼ぶぞ」

「はい!あ、空嶺さんもシヨウコって呼んでくださいね」

にこり、と大和名ーもといシヨウコがカナタに笑いかけたが、本人は表情一つ変えずに小さく頷いただけだった。とはいえ、いつも反応があるわけではないので俺は気にしない。反応があるだけましなくらいだろう。

と、そういえば聞いておきたいことがあるんだった。個人的な疑問なんだが……

「なあ、シヨウコ」

「はい？」

「お前、どうして俺らに依頼したんだ？」

「え？」

「ただ“万屋”の奴だからって俺とカナタとアズミに頼んだわけじゃないだろ？全く知りもしない相手に頼むのは気が引けるだろうし……。それに俺たちの噂、本当に知らなかったのか？」

「それは――」

「死ねええええええええええー！！！」

縁起でもないことを叫びながらバカが横から突っ込んできた。一瞬考えてから後ろによけ、右足を前に出しておく。

「ブゴフウツ！？」

おお、見事に引つかかってくれた。顔面ダイブ痛そうだな。まあ、死ねとか言ってる奴にはいい気味だ。

「いきなり人に死ねとは何事だ。冗談はお前が死んでからにしろ」

「いや死んだら冗談言えな」

「黙れ」

「ゲエツ！」

ゾンビみたいに動きながら近づいて来るんじゃねえよ。顔腫れてて余計に気持ち悪いし、思わず蹴り上げちまったじゃねえか。

「ひ、ひで……」

「ピクピクすんな気色悪い」

お前のせいで話が中断したんだ。ブツブツ何か言ってるけど無視だ無視。会話邪魔されるとかなりむかつくんだよ。

顔面押さえてうずくまってるバカをげしげしと蹴りながら少しずつ壁に追いやり、放置。相手にするだけ無駄だ。

「え、あの。大丈夫なんですかあの人？」

シヨウコがバカを指差して聞いてくる。ま、問題はない、バカだからな。

「ああ、大丈夫だ。これくらいでへこむ奴じゃな」

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

ちっ、もう復活しやがったか。うるさいなマジで。

ヤツはいきなり立ち上がるとシヨウコの手を取りキザったらしく一礼した。

「これはこれは、お見苦しいところを見せて申し訳ない。ー美しいお嬢さん、私はあなたの美貌に捕らわれてしまいました。どうか私めとお付き合いを」

「ごめんなさい」

「即答！？」

シヨクク受けてるな。っーか断られて当たり前だろ。……あ、自分から壁の隅に座り込んだ。

困った表情でバカを見ているシヨウコ、隅でいじけてるバカ、少し離れたところで傍観しているカナタ、そして俺。

面倒だがこのままじゃ何も進みそうにないな……………仕方ない。

「おい、バカ」

「誰がバカだと！？」

「お前だバカ。……………で、結局何しに来たんだスサ。シヨウコをナンパするために来たわけじゃないだろ」

十握須佐^{とつかすさ}。それがこのバカの名前だ。美人とみたら誰であろうと構わず声をかける変態。見た目的には短めの髪に右目だけを隠すように伸びた前髪が特徴。ちなみに金髪。顔はそこそこ整ってるんだから変な行動さえなきやもてるだろうに。あと身長が俺より少し高い。ム力つく。

「ああ、そりや…ってえ！サタン今なんで蹴った！？」

「お前の足に虫がいたんだ」

「そうか、なら仕方ないな！」

信じた。バカは単純思考で助かる。

「それで、続きは？」

「ん、さつき生徒会室に行ったときアズミちゃんに伝言頼まれたんだよ。即行で追い出されたけど」

「当たり前だ」

スサは生徒会員じゃない。単に生徒会長と月読先輩の従兄弟っただけでよく生徒会室に入り浸っている厄介者だ。それに、おおかたアズミの仕事の邪魔でもしたんだろ。

「で、お前とカナタを探してたら美人と一緒にいるところを発見、ぜひ声をかけなければ！とやってきた次第だ」

「ほう……なら俺にむかって死ねと叫びながら突撃してきた理由は？」

「美人な方とお近づきになっていたからだ！！」

「わかった。死ね」

「ぎゃあああああああああああああああああ！！？」

近くにあつた階段から蹴落とす。ゴロゴロ転がる音がしたがどうでもいい。ここは二階だからそのうち壁にぶつかって止まるしな。

「あの……伝言聞かなくていいんですか？」

忘れてた。まあ、大丈夫だろ。

「あんなバカから聞くより直接アズミに聞いた方が速い。いくぞ」
三階にむかつて階段を登り始めると、カナタとシヨウコが急いでついてくる足音がした。

なんか、すげえ面倒なことになりそうな気がするなあ……

11・調査一日目（後書き）

新キャラ、十握スサ。一応準レギュラーの予定。

12・調査一日目・2

生徒会室。そう書かれたプレートを目の前に、俺は立ち止まった。つられてカナタたちも止まる。

この中には先に戻ったアズミや兄貴たちが待っているだろう。だつたら入ればいいと思うかもしれないが……

「サタン、入らないのか？」

……なんでさっき階段から蹴落とした奴がここにいる？

「……さも当然のようについてくんなスサ。また階段を転がりたいのか？」

「何を言う、オレがついていったら悪いか！？」

「悪い」

「カルチャーショック！！」

いや文化は関係ないから。というかあれくらいでショック受けんなよ。

……ついカドアを開けようにもなんか嫌な予感がするんだよなあ。なんとなく原因の予想はついてるんだが、この予想が当たってた場合、何をどうしても俺が責められそうだし……あ、そうだ。

「おいスサ」

「ショック！ってなんだサタン？」

「うるさい。あと名前で呼ぶな」

「ガーン……！」

ムンクの『叫び』ってこんな感じか？それに自分で効果音言っなよイタいから。

「冗談だ……。お前、先に入れ」

「え、いいのか？」

「ああ」

「ふふん。ついにサタンも俺が頂点に立つのにふさわしいと理解したか！」

「あー理解した理解した、この場合は先頭を進むだがな。だからさつさと逝ってこい」

「みぎやー!?」

ドアに向かってスサを蹴飛ばし、ぶつかると思った瞬間にカナタがドアを開けた。

もちろん、スサは生徒会室に突っ込み……

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ
!」

すごい悲鳴だな。先にバ力を突っ込んで良かった。

少しだけ中を覗くと、のたうち回る芋虫みたいな奴の姿が見えた。
……普通は駆け寄るべきなんだろうが、転がってるのはスサだから問題ない。むしろ追撃に警戒すべきだ。あの人たちがこれくらいで終わらせる訳がない。

そして案の定……

「雑隊員！罾が作動しました！」

「波隊員！動作は正常です！」

「……では捕獲!!」

重なった二つの声が聞こえたかと思うと、バサリ、とスサの上に編み目の粗い網が落ちてきた。五メートル四方の網の中でスサが暴れるが、動けば動くだけ網に絡まっている。……近寄らなくてホント良かった。スサ、お前の尊い犠牲は忘れないぞ……

「死んでねえよ！勝手に殺すな！」

もぞもぞと網の下で動く物体が何か言っている。……生きてたか。

「ああ良かったいきってたんだなスサ俺は嬉しいよ。……ちっ」

「超棒読みな上に舌打ち!？」

「うるせー黙れ。芋虫は芋虫らしく床でも這ってる」

「誰が芋虫だぐえっ!」

「サタンだ!」

「ホントだ!」

「うわっ」

生徒会室から飛び出してきた二人の少女（というか見た目的に女の子）が俺の腕を左右から掴んできた。

……えー、その直前に何が起こったかというところ……まあスサが踏まれた。そんだけ。

「サタン、久しぶり！」

「サタン、元気？」

俺の両腕を引っ張っている二人は本当にそっくりな格好をしていた。Ｔシャツにジーンズ、裾が地面につきそうなくらい大きい白衣、Ｔシャツの色と髪をツインテールにまとめているゴムの色に違いがなければ同じと言っていいだろう。そして、二人は顔までそっくりだった。

俺の胸ぐらの位置にある双子の少女の表情は、おもちゃを見つけた子供みたいにキラキラと輝いているように見えた。……実際、この比喻はあながち間違っではないのだが。

「寝坊してない？」

「宿題してる？」

「実験台になつて！」

「ご飯作って！」

「ナギにも！」

「ナミが先！」

「むー」

「くー」

「「うー！」」

代わる代わる矢継ぎ早に左右から飛んでくる言葉にちょっと疲れるが、当分終わりそうにない二人の会話に仕方なく仲裁に入る。

「先輩方、実験台は嫌だけど料理はまた作るから離れてください」

「「えー、だつてー」」

「二人の好きなもの作りますんで」

「「ちえー」」

しぶしぶといったように手を放す双子。あー、腕が痛い。小さい

とはいえ二人ぶんの体重をかけられるとさすがにしんどい。

よもつひらなか なぎ
黄泉平坂薙と黄泉平坂波。それがこの二人の名前だ。髪ゴムとT
シャツがオレンジなのがナギ先輩、ピンクなのがナミ先輩。月読先
輩と同じ二年生で、そこで痙攣してるバカとは違いちゃんとした生
徒会のメンバーだ。とはいえ、その行動はあまりちゃんとしている
とは言えない。なぜなら――

「仕方ないか」

「仕方ないね」

「サタンが駄目なら」

「スサくんにしよう」

「うん、そうしよう!!」

そう言っただけでそんな笑顔が浮かべ、二人は生徒会室の入口に振
り向く。

「……くう、これでも無理か。ならばこれでどうだ、って手首変な
方向むいたー!？」

そこには未だに網から脱出できずおかしいな試行錯誤をしているバ
カの姿が。何故か一人でツイ。ターゲットみたいな動きしてるが、
それでどうやって網から抜け出すつもりなんだ?というか抜け出せ
ると思ってるのか?今なんか右手の手のひらが外側向いたし。見て
るこっちが痛くなってくる。

そして双子はゆっくりとスサに近付いていく。

「オレは負けねえええ! って、何ですかお二人さ、ん……?」

どうやらとても楽しげな二人に気づいたらしく、スサが少し引き
つった笑みを浮かべた。……お前の予想は間違ってるぞ。たぶん。

「あははははは」

「うふふふふふ」

「あのねスサくん」

「お願いがあるんだ」

「「実験台になってくれないかな」」

「へ、………な、なんの、ですか?」

スサがじりじりと後ずさりしているが、網に引っかかってうまく下がれないらしい。その間にも先輩たちは少しずつスサとの距離を詰めていつている。

「もちろん」

「さっきのトラップに使ってた」

「新しく発明した催涙スプレーの」

「実験台」

独特な話し方が余計に恐怖感を煽るんだよな。普段は慣れてるから気にしないけど、こういう時の二人は怖い。

今までの会話、いやほぼ一方通行だったからそう呼べるかは不明だが……に発明という単語が混じっていたのは、ナギ先輩とナミ先輩の二人が生徒会の事務部に属する自称・天才発明家で色々な道具を作り出しているからだ。そしてそれゆえに……生徒会の問題児と呼ばれている。

二人が何かを作ると、それを試すために実験台を探し始める。その何かが時には畏だったり今言ってた催涙スプレーなんかだったりするわけだ。

「いやもうさっきのスプレーで威力はじゅうぶんに体感しましたからこれ以上はちょっと……！」

「遠慮しないでいいんだよ」

「遠慮じゃな……」

「さあレッツゴー！」

「いやですって痛っ、ちょ、先輩網ごと引きずらないでって擦れる！めっちゃ擦れて痛いうえに摩擦熱で熱いんですけど誰か助けてヘルプみっ……」

あ、舌噛んだ。

そのまま二人がかりで網を引っ張って廊下に出て行くのを俺は安堵して見送った。薄情だって？一回でも実験台にされたらそんなこと気にもしなくなるぞ。

「え、あの、今のはいい……」

あ、シヨウコがいること忘れてた。俺やカナタは慣れてるから良いけど、初めて見たらそりゃ驚くよな。普通。

「あー、さっきの双子は生徒会のメンバーで一応二年生。二人とも発明や実験が好きだからああやってよく実験台を探してる。たまに罠を仕掛けて、さっきのスサみたいに捕まえてることもあるんだよ」

「せ、…先輩？…それに、実験って…」

「そこらへんは割愛させてくれ。めんど、……………話すと長くなるから。そのうちわかるし」

「はあ……………」

まだシヨウコは首を傾げてはいるが、納得とまでは行かないにしても一応ある程度理解したらしい。……………にしても、危つく本音言うところだった。セーフ。

「……………」

視線を感じて振り向くと、ドアの横で事の顛末を見ていたらしいカナタが俺に目を向けていた。いつもは隠れている目が灰色髪の間から覗いて、咎めるような感情が伝わってくる。……………だって面倒なものは面倒なんだから仕方ないだろ。

「サタン、カナタにシヨウコさんもなんでここに？」

部屋の奥にいたアズミが不思議そうに言った。

お知らせ

読者の皆さま、この度はこの

「八百万生徒会騒動記！」を読んで下さり、誠にありがとうございます。

突然ではありますが、これからしばらくの間

「八百万生徒会騒動記！」の更新を停止しようと思います。

理由は色々ありますが、完全に話を考える前に執筆を始めたこと、最近スランプ気味でもう一つのメイン作品でさえ更新が滞っていることなどがあります。

自分の思っているように話の展開が書けず、このままでは余計に悪化すると感じたため、この作品を様子見することにしました。

本当に勝手ですみません。いつかは続きが書けたらと思います。

そして更新を停止している間、

「八百万生徒会騒動記！」の番外編の短編集を書こうと思っています。

しばらくの間そちらで自分の書きたいテーマの短編、中編などを書いて、いつかはこちらを更新できるようにしたいです。それでも、更新はとて不定期になると思いますが……

では

「八百万生徒会騒動記！」の短編集、

『万神奮闘記！（仮）』

でまたお会いすることを願って……

2008年5月10日
石榴石 歩馬

お知らせ（後書き）

本当に申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6526c/>

八百万生徒会騒動記！

2010年10月28日08時45分発行